

たねニュース

平成28年(2016年)5月1日発行(隔月1回1日発行)

- 自給飼料を増産しましょう。(創業者黒澤西蔵翁の記事より)
- 緑肥作物の選び方<植物寄生線虫対策>
- サイレージ用乳酸菌「サイマスター」の利用と牧草サイレージの発酵品質と栄養価の関係
- 釧路通信 ユーザー紹介 株式会社TACSしべちゃにおける哺育牛管理の取り組み



自給飼料を増産しましょう。 (創業者黒澤酉蔵翁の記事より)

北海道統括支店 業務課 森山 淳也

平素は格別のお引き立てを賜り誠にありがとうございます。また雪種ニュースのご愛読を重ねてお礼申し上げます。

さて先般2月23日に北海道自給飼料改善協議会のセミナーが開催され、小職も参加させて頂きました。会場には全道よりたくさんの参加者が集まり、盛大なセミナーとなりました。輸入飼料価格の高止まりが続く中、粗飼料基盤の改善に向け生産者はもとより、関係機関の方々とともに弊社もお役にたてる様、引き続き活動していきたいと考えております。

今回は雪種ニュースの紙面を借りて、標題にありません様に、弊社発刊冊子「牧草と園芸」昭和48年(1973年)9月号に掲載されました黒澤酉蔵翁の「農業の意義と農法のあり方」より一部を抜粋してご紹介いたします。

戦後5年頃なので昭和25年頃だと思いますが、黒澤酉蔵翁は英国ローザム・ステッド農事試験場を訪問しています。

その農場では、同じ試験を繰り返し50年も続けている試験畑を見えています。以下、抜粋しました原文の通りです。

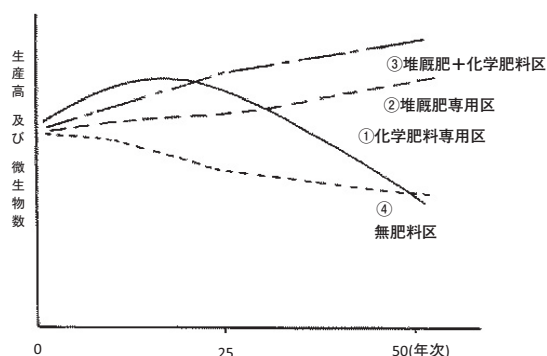
また黒澤酉蔵翁は、「適地適作」の重要性を語ってきました。今般、植生改善において色々な技術が紹介され、また関係機関の研究や各地での実証データが進んでいます。ご存知の通り北海道は広大な大地であります。例えば道南と道東は同じ北海道でも、黒澤酉蔵翁の言葉の様にそれぞれで適地適作があり、同じ飼料作物の品種でも生育が違ってまいります。

同じ試験を繰り返す50年

ここには大きな試験畑が四つある。一つの試験畑は4〜5町歩はあったでしょう。その試験内容を私は伺ったのです。

第一の試験畑は、化学肥料ばかりで作物を作っている。第二は堆厩肥だけでやっており、第三は堆厩肥の他に、化学肥料を補給肥料としてやっている。そして第四は、堆厩肥も化学肥料もやらない無肥料のところ。このような試験は5年や10年やっているのではない。何10年も同じことを続けてやっているのです。

日本の試験場だと2〜3年か長くても5年、あるいは10年もやれば非常に長い方でしょう。そのくらい年月をかけて結果を出すのであります。ところがこのローザム・ステッド試験場は、50年間、同じことをくり返しておる。



ローザム・ステッド農事試験場に於ける
肥料試験の経過図

第一試験畑は50年間、ここは化学肥料ばかりでやっておる。そうしてその土地の変化を見ているのであります。

第二の試験畑は50年間堆厩肥だけをやって、その結果を調べておる。

第三の試験畑は、これも同じことで、堆厩肥の他に土壌検査をして不足肥料成分があればその補給肥料として化学肥料を補うのであります。

そして第四の試験畑は他の三つの試験畑の比較の意味にもなる無肥料の試験畑であります。

こういう四つの試験を50年もくり返しやってお

るのであります。その結果を私は見せられた。私は実はびっくりしました。化学肥料だけを50年も続けてやりますと、これは最初10年か14~15年の間は、図のように生産高が上がって来る。ところが、しばらくたつと停滞してしまう。年数がたつにつれ、それからだんだんと落ち込んで来る。落ち込んでくれば、停止する所をしらない状態、ちょうど山のような状態になるんですね。しかも驚くべきことは、いくら化学肥料をやっても、やがては無肥料でやりつづけたものよりも、収量があがらなくなるのです。化学肥料だけを50年もやっていると、こういう結果になる。最初しばらくの間は、効果があるが、それから後は停滞し、それから次には下がりをはじめると、化学肥料をいくらやっても駄目なんです。どんどん下がってくる。そして50年もたつてくると、無肥料のものよりも劣る状態になるが、この時はもう砂漠に近いような農地になっているということです。手がつけられないような農地が生れてしまう。このように、誠に恐ろしい結果になるのであります。

第二の試験畑は、堆厩肥だけで行く方法ですが、その上がり方はさほど急ではないが、だんだんだんだん、わずかながらではあるが、上がっていつている。決して下がらない、生産力が下降しない。

それから、第三の試験畑の場合は、これは上がり方が前の堆厩肥のものより少し強い、着実に上昇傾向をたどり、50年後も停滞することはない。**化学肥料だけだと土地は終には亡びるのである。**

さらにそこには、専門のバクテリア、微生物の調査をする技師がおりまして、この技師は、土壌内の微生物、バクテリアの発達状態、その数を調べておる、同じ量の土をとって来て、その中に微生物、バクテリアがいくら棲んでおるかを調べる。これも50年間、毎年毎年同じことをやっている。

日本の研究機関では、おそらくこれは出来ないでしょう。長年月のことだから、一人では到底駄目だ。何代も替っている、15年やって、その後をその次の人がやって、またその次の人が15年やって、あるいは20年やるというようにして、3人ぐらいの人が替っている。そうして50年もずっと同じことを続けている。

ところで、その微生物、バクテリアはどういう

ふうな数になっているかということ、その傾向がこのグラフと同じである。この畑の生産力の状態と、土壤菌の状態とが一致しているんです。でありますから、50年間もこのように化学肥料だけをやっていると、微生物もほんのわずかになってしまう。ほとんどいなくなってしまう。

生きてる土は餌が必要

この試験を私はグラフと表とについていろいろ説明など聞きまして、「あっ、これだ！」私は目がさめるような、また自分が多年、こうかしら、ああかしらと、追い求めておったことが、いっぺんに解決したような気持ちになった。

私がかねて自分でも想像し、また先輩からも聞かされておったようなことが、この試験場を見た時にはじめて納得でき、解決もし、自信を得たのであります。「これだ」と、この時ほどうれしかったことはない。強い自信が出てきたわけでありませう。

諸君、ここなんです。大地の生命、土地の中に生きている生命力というものは、何であるかということ、微生物、バクテリアです、土壤菌です。土壤の中に棲んでいるこの土壤菌、この約2,000種類もあるという土壤菌、これが土壤の生命力なのです。この土地の生命がなくなれば、土地は死んでしまう。すなわち、微生物、バクテリアがなくなってしまうえば、その土地は死んでしまう。豊饒な土地、旺盛な地力、肥えている土地、何を作ってもよく出来る土地、というのは、すべてこの土壤菌が非常に豊富に棲んでいるということなんです。

この「適地適作」と前述の英国の50年間の試験データは、是非生産者の方々にもご一考頂きたくご紹介した次第です。

弊社の営業活動におきましても、生産者の方々の植生改善を始め、畜産酪農の恒久に向けて、お役にたてるよう精進してまいりますので、引き続きご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。